

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教両部大経感得図

—その製作年代と作家—

柳 澤 孝

内 容

- 一 はじめに
- 二 廃寺内山永久寺
- 三 永久寺の草創をめぐる問題
- 四 永久寺真言堂とその莊嚴
- 五 真言堂障子絵と中川成身院障子絵
- 六 永久寺真言堂伝来の絵画の所在
- 七 藤田本と永久寺真言堂東西障子絵
- 八 その製作年代と作家

一 はじめに

藤田美術館の襲蔵にかかる額装の密教両部大経感得図の二幀については、先年本誌一八七号（一九五七年三月）に拙論を発表した。この二図は、両界曼荼羅の抛りどころである根本經典、大日経と金剛頂経との伝来をめぐる説話を扱ったもの。すなわちその一図は、善無畏が北インド乾陀国の金粟王塔下で大日経供養法を感得する場面をあらわし、他の一図は竜猛

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教両部大経感得図

が南天竺の鉄塔から金剛頂経を相承する伝説を描き出している。この主題についての考証は前稿で詳しく論述した通りで、最初から一對として製作され、決して真言八祖行状図中の二図というような性格のものではない。これと同じ絵様のものが中川成身院にあったことは既に拙論の補記でも示唆したが、その後この成身院に関する詳しい確実な資料を見出したのみならず、既に廃寺となった大和の内山永久寺真言堂にも同一画題の絵が描かれていた事実を発見するにいたった。これらによって藤田本の主題解釈が妥当であるとの確信を得た次第である。

この藤田本の伝来については、同館宝物台帳四号「古画幅録」（明治三十七年）に、「弘法大師行状記図」という題名で記載されており、明治三十七年までに藤田家の有に帰したことが知られるが、しかしそれが何時どこから入手されたかは明らかでない。しかるに一方、永久寺に関する諸記録などを調査する間に、同寺真言堂に描かれてあった東西障子絵が、この藤田本二幀そのものにほかならないという結論を導き出すにいたった。しかもこの真言堂は、創建年次が明らかであるばかりでなく、右の

障子絵を描いた作者の名さえ知られるのである。しからば藤田本の絵画史上に占める位置は極めて重要といわねばならない。以下本稿⁽¹⁾において、永久寺真言堂、その堂内の絵画、それと藤田本との関係、さらに藤田本の製作年代と作者などについて考察し、前に発表した拙論を補足したいと思う。

二 廃寺内山永久寺

ここに問題とする永久寺⁽²⁾は、また内山寺と云われた。大和国山辺郡朝和村、現在の天理市大字杣之内山口の地に、藤原後期以降多数の堂塔を擁して栄えた名刹である。藤原から鎌倉後期までの本寺のさまは、後述する「内山置文」や「内山之記」がそれをよく物語っている。その後延元元年（一三三六）には後醍醐天皇が吉野に遷幸される途次、休息されたと伝えられ、降って文禄四年（一五九五）には、豊臣秀吉から本寺の諸堂並びに諸院諸房（合せて五八）に、九百七十一石の知行が与えられ、また江戸時代にも同額の知行を受けており、法隆寺の千石に匹敵するほどの大寺であったことが知られる。江戸時代にこの地を訪れた石出吉深の紀行文「所歴日記」⁽⁵⁾（一六六四年）第四によると、

（前略）内山永久寺にいたる。此寺は鳥羽院の御願にて御受戒の御師寛惠上人開基の霊地也。永久年中に草創し給ふにより年号を寺号とす。此地五鉢のすがたに似て内にひとつの山有けるにより内山と云。本堂の本尊は阿弥陀、釈迦堂後にあり、観音堂かたはらに十三層の石塔あり、坤の方に千体の地藏堂、其西に知恵光院と云護摩堂あり。「本堂の」傍に鐘樓、灌頂堂。乾の方に開山寛惠上人の御影堂あり。其後に宝蔵、弘法大師の御影堂、次に八角の宝塔。其かたはらに丹生明神の御社、鎮守春日熊野布留大明神

の三社あり。門前にいとひろき池ありて見入いとよし。（後略）とあるほか、「和州旧跡幽考」「大和名所記」「大和名所図会」などにもこの永久寺についての記載があり、堂塔が立ちならび輪奐の美を競っていたようである。また幕末の大和絵画家冷泉為恭が本寺の一の蓮乗院に潜み、のち元治元年（一八六四）附近で長州浪士のために斬殺されたのも有名で、しかしその後いくばくもなくこの寺は、明治初頭の排仏毀釈によって、全く廃絶するに至った。

その寺址は天理大学図書館から東南数百メートルにあたり、東に山を背負い、また南と北とに稜線がのび、西方だけ開けた山ふところに位置している。この地形については前記紀行文にも見えるが、その山ふところの中央奥がまた一段

挿図1 永久寺遺蹟 西方から望む（中島ある園池、後方の小山が内山）

小高くなっている、内山と呼ばれたのもそのような地形によるのであろう。この内山を背にして永久寺の堂塔が立ち並んでいたのであって、寺域は五町四方あったという。西方には丹波市を望み、さらに大和平野を距てて生駒の山なみを遠望することができ。ここか

ら西北へ数百メートルのところに、古くから栄えた布留社すなわち有名な石上神宮がある。⁽⁶⁾この境内には明治に永久寺から鎮守四社明神の拝殿が移されており、その瀟洒な遺構が現存している。ところで、この永久寺の寺域一帯は現在開墾されて田畠となり、堂塔の基址さえも跡づけられないが、伽藍の主要部のあったところは階段状の台地をなしていて、盛土した際の石垣も諸処に残っている。その下方すなわち西寄りに藤原

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教両部大経感得図

挿図2 永久寺絵図（正保2年）

鈴木氏蔵

時代以来行われた中島形式の園池があり、今も水をたたえ、中島もあって、そのかみの面影を伝える⁽⁷⁾。この中島の中央には明治二十二年四月建立の内山永久寺記念碑と刻まれた標碑が、また池の西南、後醍醐天皇の休息されたという御所跡にも碑が建てられている。

かかる状態であるので、永久寺の旧観を偲ぶことは困難であるが、しかし江戸時代の永久寺絵図——正保二年本（一六四五）（挿図2）、享保十五年本（一七三〇）、明和五年本（一七六八）——が院家の末裔の諸家に保存されていて、江戸時代における堂塔伽藍の位置やその全貌を彷彿することができ⁽⁸⁾。特に享保本には建物の大きさの註記が添えられてあり、それらの旧構を想見し得る点で貴重である。なお明治になってこの永久寺を偲んで作られた絵図（明治二十二年）が前記石上神宮の拝殿に掲げられており、またこれと同様の図柄の版本も鈴木家に現蔵されている。このように永久寺はその名にも似ず、明治の初期に廃寺となったが、ただ同寺に長く伝わった什宝類の一部が、分散しながらも現在いくつか保存されているのは、せめてもの幸といわなければならない⁽⁹⁾。

三 永久寺の草創をめぐる問題

次にこの永久寺の草創から考察してみよう。この問題に入る前に一応本寺に関する記録について説明しておく。まず平安末期から鎌倉後期に至る記事を収録した二種の古記録、すなわち「内山之記」と「内山置文」⁽¹⁰⁾について述べよう。この二つの記録は既に森末義彰氏が紹介されており、同氏の所説のように、両者の記事は重複するところが少なくないが、前者が雑然としているのに対し、後者はかなり整理された記述と

なっている。「内山置文」(以下「置文」と略称する)はその巻頭に、

内山事 号永久寺、元名大昌庄

代々曆記并古老伝等、随勘得就聞及注之、

干時文保元年二月十九日薬湯療養之隙矣

とあって、鎌倉後期一三一七年に成立したことが知られる。もと永久寺中院経蔵に秘蔵され、のち水戸の菅家の所有に帰し、現在東京国立博物館に所蔵されている。一方「内山之記」は成簀堂古文書目録によると、室町初期の写本とあるが、記されている下限は嘉元三年(一三〇五)までであり、しからば置文とはほぼ同時頃のものとして推定される。これは永久寺より大乘院へ伝えられ、今日成簀堂文庫の所有である。そのほか時代が下るが慶長五年(一六〇〇)二月の奥書をもつ「和州内山永久寺之縁起」(以下「縁起」と略称する)も見逃し得ない。永久寺の美術に関連する史料としてもっとも重要なのは右の三点である。⁽¹³⁾

さて、この永久寺は菅家本「諸寺縁起集」「一乗院文書」「興福寺略年代記」などによると、永久二年(一一一四)頼実の草創となっている。特に「諸寺縁起集」では、⁽¹⁴⁾

永久寺 号内山寺

件寺者、永久二年、依鳥羽院勅、頼実法印建立、大乘院本願隆禅法印弟子也、真言開白小野真乘房、別当ハ尋範大僧正、本堂本尊阿弥陀

とあって、鳥羽院の勅命によって建立されたと記している。大日本史料三ノ一六(一〇・三)、永久二年雜載の項もこれらの文献を挙げてその草創の年としており、また史料綜覧卷二(一九二)にも永久二年五月「是月権少僧都頼実、永久寺ヲ奈良ニ建立ス」の項を見出す。これに対して永久

元年の説もある。それは応永三年(一三九六)永久寺第十世光賢が鎌倉時代の亮恵上人画像の表装裏に、後代のために記すとして貼付けられた書付によるもので、その文を次に掲げる(挿図3)。⁽¹⁵⁾

挿図3 亮恵上人画像裏書

永久寺真恬紹隆本願亮恵上人者、鳥羽院御受戒師、依尊崇而以年号賜寺号畢、彼者永久元年草創、入滅者治承二年^{戊戌}五月廿八日也、為後代記矣、

當山第十代末学金剛仏子光賢^{行年四十九夏臘三十二}(花押)

すなわち、光賢は本寺の創建を永久元年としている。しかし後述する亮恵はその時十六歳であり、草創者にみなすには不適格と云えるし、また彼の歿年も「内山之記」によると、文治二年(一一八六)となっていて、前記の治承二年説(一一七八)とあわず、この光賢の説はそのままには信じ難いように見える。一方永久寺を考える場合、前に述べたようにもっとも拠るべき史料である「置文」及び「内山之記」には本寺の草創年次を明記していない。しかも前者の寺塔并大喜院等事の条において、最初に本堂の項があり、そのはじめに次のような記述をみる。

或記云、保延四年始造營云々、但寺号已永久寺也、当知永久年中草創歟、^{但最初所作本堂也}

これによると、既に文保の時に本寺草創の年次が不確かであったことを物語っており、逆に永久寺の寺号から永久年中の草創かと疑っているのである。もっとも永久寺という寺号は、永治元年(一一四一)には既に

用いられていたことが「内山之記」⁽¹⁷⁾によって知られる。とにかく本寺の永久年間草創については、現在のところこれを明らかにする資料を見出しえないが、無条件に否定することもできないようで、或いは草堂の類が存していたのかもしれない。

ところで前記「置文」によれば、本寺の堂塔中建立年代の知られるものとも早いのが保延二年(一二三六)の真言堂であり、その翌年に多宝塔が建立され、続いて同四年、前記のように本堂が造営し始められるなど保延年間に相次いで伽藍が整備されていることが注目される。かつそれらの堂内にはそれぞれ仏像、仏画なども同時に作られており、真言堂に關しては後述するが、多宝塔は四仏を安置し、かつ十六善神像が図繪されたという。すなわち「置文」の紙背にある「塔供養開白詞」⁽¹⁸⁾によるとこの塔並びに四仏のうちの釈迦像一軀と十六善神繪像とは知足院前關白藤原忠実の奉為に、藥師像一軀は鳥羽上皇の皇后(忠実の長女)、弥勒像一軀は禅尼殿下(皇后の母)、もう一軀の弥陀像は先師法印(隆禪)の、それぞれ奉為に造られたとあって、極めて由緒のあるものであったことがうかがわれる。この塔の外観は「内山之記」に、

一塔事、与禅定院之塔同之、本願同之故也

と記されており、禅定院と同じような八角宝塔形式のものであった。⁽¹⁹⁾ここで注意されるのは、本願が同じ故と記されていることで、禅定院が頼実によって建てられた事実から見て、この場合本願は頼実を意味したものに相違ない。確かに「内山之記」には本願僧都頼実としてしばしばその名が見え、また「置文」の本願事の項にもまず初めに彼の名を挙げ、簡単な略歴をも添えてあり、本寺の草創に頼実がもっとも関係深かった

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教両部大經感得図

ことが推測される。その伝によれば、淡路守藤原頼成の息で、興福寺大乘院開基権少僧都法印隆禪の弟子となり、大治五年(一一三〇)権少僧都に任ぜられ、保延二年(一二三六)正月これを辞し、康治元年十月九三歳で寂している⁽²⁰⁾(一二四二年)。前記の多宝塔が忠実や皇后などと関係の深いのも本願である頼実が彼等に信任の厚かったことを物語っているのに相違ない。永久寺には何時頃の作かを明らかにしないが、頼実の木像が存し、「集古十種」にその図(挿図4)が掲げられており(恐らく本像もまた明治の廃寺まで保存されていたのであろう)、その風貌を想見することが出来ようか。

集「集古十種」木像上人頼実
挿図4

頼実にはその附属弟子として京極殿太政大臣藤原師実の子の弘覚(のち尋範と改む)がいる。保延二年頼実が権少僧都を

辞職したときに法眼に叙せられた人で、忠実はこの弘覚の甥にあたる⁽²¹⁾(但し忠実は尋範より二三歳年長)。頼実と忠実との関係は、この弘覚すなわち尋範の介在したことから理解されよう。

このように、頼実は弟子の尋範やそのバックの關白藤原家並びに頼実自身の帰依者などの協力を得て、本寺の堂塔を整備するにいたったのである。本寺が前にみたように保延二年から建て始められ、しかもその同じ年に頼実が権少僧都を辞していることは、単なる偶然とは考えられない。或いは頼実の隠棲の地として造立されたのではなからうか。彼の

墓がこの地に建てられているのも理由のないことではない。

なお「置文」によると、本願事の条に右の頼実と共に前法務大僧正尋範の名も挙げられている。当時、尋範は法眼であったが、長寛二年^(六一四)興福寺別当、承安二年大僧正となり、かつ一乗院の院主となるなど興福寺の要職をつとめた。しかし承安三年^(一一七三)興福寺衆徒が多武峯を焼いた責任を負って寺務並びに大僧正を罷められ、この地内山に隠棲するに至ったのである。⁽²²⁾そのさい本寺内に大喜院や温室などが造られている。⁽²³⁾尋範は師の頼実が本寺を造営するについて尽力した関係もあって、本願の一人に加えられたのであろう。

最後に、本寺が前記のように興福寺の僧によって創建されたにもかかわらず、真言堂が初めに建てられていることについても触れておかねばならない。これは文献上からは明徴をあげえないが、まず当時の一般的な趨勢として、法相などの顕教諸寺における真言兼帯が多く行われ、祈祷修法の道場を持つ寺院も少なくなかったことが考えられる。或いは興福寺大乘院の祈祷所として、この永久寺が充てられたのかもしれない。⁽²⁴⁾

とにかく永久寺の伽藍中に真言堂がまず建てられ、真言僧の亮恵が起用されたのである。しかも本寺の寺務が彼によって行われ、以後その弟子の系統に受け継がれているのであって、すなわち興福寺僧の創建とはいえ、真言の勢力の強かったことが推測される。第十世の光賢が前記亮恵上人画像の裏書に亮恵を本願と記したのも、それを裏書しているといえよう。この亮恵は「置文」や「内山之記」にしばしばその名が見え、元興寺出身で尋範の真言の師範であったとも記され、その墓所も前記本願の両僧のそれと並んで存していたという。「血脈類集記」によると、醍醐

寺第十二代聖賢阿闍梨より天承元年^(一一三二)灌頂を受け、また内山真乗房と号したとあり、その付法の弟子七人も挙げられる。彼の没年は前述のように明らかにしがたいが、「内山之記」では文治二年^(一一八六)に没したとしている(尋範より三歳年長)。この亮恵上人を描いた鎌倉時代の肖像画は今日に伝えられており、彼の風貌をうかがうことができ(挿図5)。後述する真言堂には亮恵の本尊である大威徳明王像が安

置されてあったと「置文」にあり、またこの真言堂の内部荘嚴なども彼の管掌にかかると想像される。

四 永久寺真言堂とその荘嚴

永久寺真言堂が保延二年^(一一三六)に建立されたことについては前に述べた。この拠りどころである「置文」には、その内部荘嚴についても

挿図5 亮恵上人画像

触れている。原文を示せば左記の通りである（挿図6）。

真言堂一字

古老傳云保延二年建立、同年十月日真言堂供養、導師小田原現觀房上人、讚衆十二人、童舞在之、兩界曼荼羅願主南仙房不知正字、本願祇候人云々、令与力給云々西万タラ佛師頼円、東方タラ佛師靈山房、東西障子繪、々藤三宗廣書之、八祖銘定信卿書之、所安置兩壇大威徳、東壇金銅像亮恵上人本尊也、西壇木像後年追造之、佛後障子灌頂十二天并裏四天、建長五年九月重命尊蓮法橋所書也、額弘誓院大納言入道所書也、曆代加新而已

挿図6 「内山置文」の真言堂の項

すなわちこれによれば次の諸点が明らかとされる。①保延二年に建立された真言堂は、同年十月供養され、その時の導師は東小田原山寺の現觀房上人が勤めていること。

②真言堂で最も重要な兩界曼荼羅はの場合本願頼実の祇候南仙房の母が願主となり、頼実がこれに与力していること。③後述するように南面していたこの堂は、他の真言堂の莊嚴例と同様、兩界曼荼羅が東西にあり、その兩界のうち、西方の金剛界は絵仏師頼円、東方の胎藏界は同じく靈山房がそれぞれ描いており、また東西の障子絵（これは後述の中川成身院の例から、兩界をかけるために東西にしつらえられた障子帳に描かれた絵を意味しているものと思われる）は藤三宗広の筆にかかり、さらに八祖像もあって、その銘文は十二世紀を代表する能書家藤原定信がこれを書したこと。④兩壇の大威徳明王像のうち、東壇の金銅像は亮恵上人の本尊

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教兩部大經感得図

で、これに対し西壇の木像は後年に作られたものであること。⑤仏後の障子には灌頂用の十二天像すなわち立像の十二天像、その背面には四天王像が描かれ、共に尊蓮によって建長五年（二五三）に描き改められたこと。⑥また真言堂の額は新たに弘誓院大納言藤原教家によって書かれたこと。——以上の如くである。右の記事は古老の伝によるとあるが、記すところ極めて詳細で、しかるべき抛りどころのあったものとみるべきであろう。

また同じ真言堂の莊嚴については「内山之記」にも記述がある。その部分だけを次に掲げよう。

一真言堂事、東西障子絵者、繪藤三宗廣之筆也、

佛後障子四天等者、古物破壊之間、尊蓮法橋筆也、

八祖銘者、定信之筆也、兩壇大威徳者、有私口伝、

東ハ金銅、自聖人之時被安置、西ハ木像後造之云々

とある。さらにこの条よりやや前に次のような文も見える。

一建長五癸丑九月下旬比、真言堂十二天四圍繪之、佛師尊蓮

この「内山之記」に記された絵画類は、兩界図の記載を欠くほか、前記「置文」の文とその内容が全く一致している。この二記録から建立当初の堂内莊嚴に用いられた絵画作品を列举すると、次の五種類となる。

- ① 頼円・靈山房筆 兩界曼荼羅図
- ② 宗広筆 東西障子絵
- ③ 定信賛 真言八祖像
- ④ 十二天像（当初あったのを尊蓮が描き改める）
- ⑤ 四天王像（同）

一方、慶長の「縁起」には、灌頂堂すなわちこの真言堂について、左の記事が見出せる。

一 灌頂堂、南面にして七間四方也、是保延二年十月建立、但其頃は莊嚴もさまで極めさりしに後建久二年二月にいたりて大に修理を加とかや、本尊大日如来定朝の作、兩界の曼荼羅ハ琢磨法眼の筆也、抑此曼荼羅應永廿六年の夏盜賊ひそかにとり出して他所に持行しに、当寺の座主光実法印を始満山乃大衆等大に是を歎き、各肝胆を碎き出現の事を祈りけるに、七月に満する曉何ものともしれす密に此堂の側まで返し置ぬ、是私の法力のみかは必完護法善神の加護ありしものなり、又八祖の御影は高野乃真然僧正の筆或は金岡乃筆ともいへり、本願亮恵上人乃御影は光賢僧正の筆、其外金岡の筆の四天王、土佐光信の写せし十二天、南天の鉄塔・金粟王塔の図、八祖行状の絵等あり。

すなわち、これによると真言堂は南面する七間四方の堂で、保延二年の建立にかかり、建久二年（一一九二）二月には大修理が加えられている。兩界図は応永二十六年（一四一九）の夏盜賊によって持出されたが、七日後に戻されたとあり、また堂内に存した彫刻絵画としては、この兩界図のほか、本尊大日如来像、八祖画像、亮恵上人画像、四天王及び十二天画像、南天鉄塔・金粟王塔図、真言八祖行状図の多数が挙げられている。もともと「縁起」に見える彫像や絵像の作者については「置文」等の記載と比べると何れも伝説化されている。しかし前記の応永二十六年における兩界図の盜難事件は、同年五月二十一日に記した詳しい記録「内山永久寺真言堂盜入時日記」⁽²⁹⁾が別に存してこれを裏付けるし、また亮恵上人画像は前に述べたように、光賢の裏書を伴なって今日に伝えられており、この「縁起」の文も作者の比定に難点があるほかは、一応信憑するに値いするものと思われる。

さて、ここに記されている絵画作品は七種類で、「置文」などで見た創建当初の作品よりは二種類多い。すなわち「置文」などの記載と比較してみると、その中の兩界図、八祖像、十二天、四天の四種類に関する限り画題は全く同じで、ただ「置文」などに見える東西障子絵の名はなくその代り亮恵上人画像と、南天鉄塔・金粟王塔図と、さらに真言八祖行状図との三種類が新たに加えられているのである。すると、これら三つの画題の中にさきの東西障子絵に当るものが含まれている可能性が考えられる。東西障子絵は、中川の成身院の例から考えて、兩界図をかける障子帳に描かれた絵であったもののようで、東西の二図であったとすれば、亮恵画像や真言八祖行状図では、それに当たるとはみがたく、残りの南天鉄塔・金粟王塔の二図が当然問題になるわけである。これらについては、更に次章で詳しく考察したい。

最後に、この真言堂の旧観は、江戸時代の絵図によってこれを偲ぶことができる。すなわち一間の向拝を付した入母屋造檜皮葺の堂として描

真言堂 永久寺絵図部分 挿図7

かれ、かつ享保十五年（一七三〇）の絵図では、「八尺間七間四方」の註記があり（挿図7）、前にみた縁起の文とも一致するようである。この真言堂の位置は現在もお永久寺旧趾、園池の東北、一段高くなったところに確認することができ、その敷地は耕やされて夏蜜柑畠となつ

ている。

この真言堂は、他の堂塔と共に明治の廃絶までその旧構を存していたようで、これを取り毀したという大工の子孫もなお天理市丹波市に現住しているよしである。

五 真言堂障子絵と中川成身院障子絵

前章でも示唆したように、この真言堂内に存した多数の絵画類の中、「置文」並びに「内山之記」に記される藤三宗広筆の東西障子絵と、「縁起」に挙げられている「南天鉄塔・金粟塔図」とが、果して結びつくか否かの問題について、ここで考察を進めなければならない。この問題を解決するには、まず中川寺の成身院の場合が参照される。

中川寺というのは、大和添上郡東里村中の川にあった古寺で、奈良市の東北約六キロに位置する。永久寺よりも少し前に実範によって開かれたもので、その成身院すなわち真言堂は、本寺の中心をなす堂宇であった。実範^(一四)は興福寺出身で、律・浄土にも精しく、又東密・台密をも学び、中川寺建立以後少将上人・中川上人等とも呼ばれ、十二世紀前半期の南都を代表する碩学として有名である。この実範並びにその所建の中川寺については、既に堀池春峰氏の詳しい研究がある。⁽³⁰⁾成身院の建立年次は明らかでないが、堀池氏によると、永久二年(一一四)二月頃に完成したものとみてよいという。

この成身院は覺鑊が建立した高野山大伝法院と共に真言堂場として並び称せられた名刹である。その内部の構成や荘厳に関しては、頼璩^(二六)の撰した「真俗雜記問答鈔」⁽³¹⁾一七に次のような興味深い文がみら

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教阿部大經感得図

れる。

問、高野伝法院兩界背壁本壁下不透、今度新造時下透事、如何、答、宝光院云主云、高野伝法院中川成身院是俱写青龍寺作法、同彼実範上人建立成身院不透背壁下、此覺^(鑊)上人建立本不透、今遺弟等東西列座主時、歎向壁忌旧儀透下、恐失祖師本意歟云々、予拜中川根本成身院、兩界背壁作仏台障子帳、奉懸兩界、台下一二寸許雖透^(色)下也、兩界背壁西面龍猛開鉄塔之儀式、其一階塔如根来寺小塔、上南角○紙形書龍樹名文、東面善無畏於金粟王塔下感見供養法卷之儀式、其塔五重塔也、上南角○紙形書善無畏銘文、已上画珍海已講筆、銘法性寺殿筆、又本尊金剛界大日、頭光中輪光安五仏種子、炎光安五拂三時耶形、身光中輪光安四撰種子、焰光安四撰三昧耶形也、幸助法印作云云、背壁障子帳西図十二天、裏大師於大唐蘇州投三杵儀書之、白衣小院筆。

これによると、兩界背壁の下を透かす透かさないのことは別として、中川成身院の内部には、真言堂を特色づける兩界曼荼羅が東西に懸けられ、この場合そのための仏台障子帳がしつらえられていたとある。その障子帳の背面には、それぞれ障子絵があり、そのうち、西の障子絵は竜猛が南天竺の鉄塔を開いている場面をあらわし、その鉄塔は根来寺の小塔に似た一重塔形で、かつ図の上方南隅、すなわち右上に色紙形があつて、竜猛に関する銘文が書かれており、一方東の障子絵は、善無畏が金粟王塔下で大日経供養法を感じるところを描き、その塔は五重塔で、この図の場合も上方の南角、すなわち左上の色紙形に善無畏についての銘文が記されていたというのである。かつその作者として、絵は画僧として有名な珍海、書は定信と並び称せられた法性寺忠通の名が挙げられている。なお本尊は金剛界大日如来像(幸助・康助作)であり、この本尊の背壁すなわち北側の障子絵には、表側に十二天図、裏側に空海が唐の

蘇州において三杵(鮎)を投ずる場面(共に白衣小院筆)⁽³²⁾であったことも知られる。

成身院に関してこのように語ったという宝光院主というのは、恐らく高野の道範に当るのであろう。道範(一一八一—一二五二年)は「野沢血脈集」によると、建仁二年(一二〇二)に宝光院に住し、特に論議を好み、畿内を遍歴したといい、建長四年(一二五二)に寂している。もしそうならば、道範は草創から約百年後の成身院を実現していることになり、そのいうところは信すべきものと思われる。鎌倉時代の「三僧記類聚」⁽³³⁾にも、この成身院の特に後壁、すなわち先の両界図を懸けた仏台障子帳の背面について簡単な次のような記載がある。

実範上人中川堂後壁事 其堂安置金界中略大日云々

金方ニハ鉄塔ヲ書 (中略)

胎藏ニハ金粟王ノ塔下ニテ無畏三藏得供養法ヲ形ヲ書、其空ノ中ニハ高野御室金泥ヲ書入仏三昧耶真言給云々、左行書之、法性寺入道関白書色紙形云々

すなわち画題は前記「真俗雜記問答鈔」のいうところと全く一致し、ただ善無畏の金粟王塔図には、空中に高野御室覚法(一〇九一—一五三年)の書入れた三昧耶真言があったことが加えられている。

さて以上眺めた中川寺成身院の内部に関する記事を、前章で詳述した内山永久寺真言堂と比較するとき、両界図をはじめ南天鉄塔・金粟王塔図、十二天など、両者共に一致しているものが少なくない。もっとも南天鉄塔・金粟王塔図については、永久寺の場合「縁起」に挙げられているだけで、それが何処に描かれていたかは記されておらず、一方「置文」や「内山之記」では、東西障子絵とあるだけで、その画題が何であった

かにふれていない。しかし前に見たように成身院の例を参照して考えると、東西障子絵というのは、まさにこの南天鉄塔・金粟王塔の二図に外ならないことになる。すなわち永久寺真言堂においても、成身院と同様に東西に両界をかける仏台障子帳があり、その背面に、東には善無畏の金粟王塔下に大日経供養法を感得する図、西には竜猛が南天の鉄塔を開く図が、それぞれ描かれていたと推定されるのである。

さらに色紙形については、永久寺の場合、どの文献にも何の記述もな

藏氏堀

文書下行下模 筆恭為泉冷 図挿 8

いが、成身院の例から考えても、また平安時代の障子絵には色紙形をつけるのが通例であったことからしても、永久寺のそれに色紙形が附せられていた可能性は充分考えられる。又「置文」並びに「内山之記」によれば、この真言堂内には定信の賛した八祖像があったと記されている。ならば同じ堂内に同じときに描かれた障子絵の色紙形を定信の筆と考えると、決して不当ではあるまい。

ところで、この永久寺真言堂が前章で述べたように明治初年まで存続していた事実は、堂内にあった前記諸作品もまた(必ずしも全部でなかったかもしれないが)その時まで保存されていたことを予測させるであろう。江戸末期にこの永久寺に

身をひそめた冷泉為恭の筆になる、真言堂の真言八祖並びに真言八祖行状図を新写する下行文書(挿図8)⁽³⁴⁾もあって、これを裏付けている。しからば真言堂が取りこわされた際に、それらの宝物類は恐らく分散したのであろうが、何れかに保存されて今日に伝わっている可能性が考えられる。次にそれらの行衛について現存する遺品から追究してみよう。

六 永久寺真言堂伝来の絵画の所在

私は最初に述べたように、かつて藤田美術館蔵の両部大経感得図について考察したが、その後前記永久寺関係の記録の「置文」や「縁起」などを読み、中でも真言堂の藤三宗広筆東西障子絵と南天鉄塔・金粟王塔図との記事に特に関心をもった。やがて前章で述べた通り、「真俗雜記問答鈔」の中川成身院に関する記述を見るに及んで、右の障子絵の画題がとりもおさず南天鉄塔・金粟王塔図にほかならないことが理解されるにいたった。前章でも触れたように、真言堂の取りこわされたのち、この障子絵が他の宝物類と共にどこかに伝わっているかも知れない可能性は当然考えられるところである。そこでその手がかりをつかむためにしばしば永久寺の旧蹟地天理市を訪れた。郷土史家小田基彦氏の懇切な案内を得て、永久寺関係の末裔その他の方々を訪ね、情報を得ようとつとめたが、真言堂が廃絶して以来既に百年に近い歳月を経ているため、この障子絵に関しては残念ながら何らの手がかりも得られなかった。もともと同市居住の多武峯の社家堀家では前記の冷泉為恭が書いた真言堂の八祖並びに八祖御伝新写の下行文書を、また永久寺角ノ院の院家鈴木家では、当時の堺県知事税所厚氏の手に両界曼荼羅をはじめ真言八祖、

小野小町、弘法大師などの絵画、彫刻の類が渡ったよしの文書を、それぞれ拝見することができた。

一方、この永久寺真言堂から出たものについて、出来る限りそのゆくえを追究するのに努めたところ、まず亮恵上人画像と真言八祖像に関する知見を得ることができた。亮恵上人画像(挿図5参照)については、前にも度々ふれたが、昭和九年四月奈良博物館に出陳され、同十五年十二月の前山家売立目録に見え、その色刷は簡単な紹介文と共に星岡一二三号(一九四)に掲載されている。さらにそれとほぼ同じ時期に、この図版等と島田筑波氏の解説を添えた「亮恵上人画像記」が出版された(一九四一)⁽³⁵⁾。この画像は鎌倉時代中葉を下らない佳品で、前記のような光賢筆の裏貼付紙(挿図3参照)があるほか、安永七年(一八六〇)永久寺の威徳院澄禪が修理した旨の裏書も記されている。現在の所在はつきとめ得ないにしても、昭和十六年当時には沼津市の栗田家の有に帰していたのを知り得る。

次に真言八祖像については、秋山光夫氏が「日本美術協会報告」二三輯(一九三)に「独逸に於ける東洋美術に就いて(中)」の論考で、ベルリン民俗博物館蔵の真言八祖像(八幅)を紹介されたが、その各幅の表装裏に八祖の法名と共に「永久寺真言堂」と雄勁な文字で大書してあることを指摘されている。どのような径路でドイツに渡ったかは明らかでないが、この八祖像が真言堂から出たものであることは疑いなく、また秋山氏はその八祖像の色紙形に書かれている筆蹟を藤原定家又は藤原定信かと鑑定されており、すると前記「置文」などの記載通り、「八祖銘定信」がこの大戦時まで伝わっていたことになる。しかし惜しくも右の画像は

この大戦で焼失して了った由である。

右の二種のほかに、勝本氏旧蔵現在某氏蔵の真言八祖行状図⁽³⁷⁾(挿図9)も、同じく真言堂伝来のものに相違ないと推定される。この行状図については、森嶋氏が国華七七号^(一九五六・一二)に紹介されているが、その伝来に関しては触れられるところがない。しかし「縁起」に真言八祖行状図とあることや、為恭の写した模本が永久寺にほど近い石上神宮で明治初期に権宮司であった富岡鉄斎翁の家に伝わっていること、及び前記の八祖像とこの八祖行状図を為恭が模写する計画の分る文書が天理市堀家に

保存されて

いること、

かつその文

書に見える

行状図の寸

法と現存の

ものとを比

較するのに

幅において

は殆んど一

致し、天地

において現

在のものが

僅かに二・

三センチ少

挿図9 真言八祖行状図 龍智部分(赤外線写真)

ないだけであること、などからみて、私は某氏蔵本が真言堂内にあった真言八祖行状図にほかならないと信ずる。詳しいことは別に同図について考察する機会にゆずりたい。

以上のように永久寺真言堂に伝わった幾つかの絵画について、廃寺後の行衛や今日の所在を跡づけうるのである。しからば同じ堂内にあった南天鉄塔・金粟王塔図が、今日まで伝存されていることもまた当然予想されるであろう。私は後述の理由から藤田美術館蔵の密教両部大経感得図二幀がまさにこれにあたることを主張するものである。

なお、藤田家には明らかに永久寺から伝来された什宝のある事実もこの場合見逃し得ない。現在藤田美術館蔵の有名な阿字義伝がその一つで同館の台帳「古画幅録」⁽⁴⁰⁾によると、為恭が殺される当時まで所持していたもので、彼の潜伏していた永久寺の一院に伝わり、後、藤田家に入ったことが知られる。また同館の小野小町像(その図は「集古十種」に所収)も永久寺旧蔵であったことが前記の台帳に記されている。⁽⁴¹⁾そればかりでなく、永久寺にあった石彫の所謂口の不動⁽⁴²⁾(挿図10)も、藤田家の須磨の別

荘に運ばれ

ているので

ある。この

像はそこか

ら宝塚の別

荘へ移され

その別荘が

他家の手に

挿図10 石像不動明王
(永久寺「口の不動」)

挿図12 龍猛南天鉄塔相承図

同蔵

挿図11 善無畏金粟王塔下感得図

藤田美術館蔵

渡ったが、今日でもなお同所へ永久寺の近くの人々の不動参りが行われているという。なお右の不動の藤田家に入ったのは大正初期のことであるが、藤田家と永久寺とが密接な関係にあった一証であり、以上のような事実から見ても、同じ藤田家に真言堂の東西障子絵が入った可能性は、いよいよ確実と思われる。

七 藤田本と永久寺真言堂東西障子絵

さて、藤田本両部大経感得図二幀、すなわち善無畏の金粟王塔下大日経供養法感得図(挿図11)並びに竜猛の南天鉄塔金剛頂経相承図(挿図12)に関しては、既に前の論文でその画題を詳論し、また製作年代が十二世紀中葉を下らないと見られることについても述べた。この二図は現在室町時代の紙本着色両界種子曼荼羅図がそれぞれ背面にあり(この場合胎蔵界と金剛界とが逆であり、現在の額装仕立とする際に間違えたものと思われる)、時代を異にするが、二大経と両界図との相依関係が示される。しかも金粟王塔図の方には右上に色紙形が貼付けられてあり(南天鉄塔図の方は現在失われている)、その善無畏の事蹟を記した書体は定信の真蹟で、かつ一一四〇年以前のものと考定されるなど、右の拙文に論じた通りである。いまこの二図を、さきに掲げた「真俗雜記問答鈔」と「三僧記類聚」に記された中川寺成身院の記事と比較するとき、その図様そのものも殆んど全く一致しているのに気付かれるであろう(第五章参照)。するとこの藤田本はいかにも中川の成身院の東西障子絵であったかのようで、年代的にもあるいは一致するともいえるように見える。しかるに成身院の場合においては、第一に、金粟王塔図の空中に仏三昧耶真言が描かれて

いたこと、第二に同図の色紙形の位置が左上であったこと、第三にその銘文を法性寺忠通が書いていることの三点で、藤田本のそれとは相違しており、藤田本を成身院に結びつけることは出来ない。このように成身院のものでないとすれば、その成身院の二図と同一画題で極めて類似した永久寺真言堂の東西障子絵が当然浮び上るわけである。

ここで、さきに発表した藤田本に関する考察と、本稿で今までみてきた真言堂の東西障子絵についての知見とをあわせて、箇条書きにまとめてみよう。

1 藤田本は様式的に十二世紀中葉を下り得ない作品であること。

2 藤田本の善無畏金粟王塔図に貼付けられている色紙形の書体は定信の真蹟でかつ一一四〇年以前のものであること。

3 一方、永久寺真言堂には藤田本と同一の画題の二図が東西障子絵として描かれていたこと。

4 その東西障子絵には当時の障子絵の例からいって色紙形がつけられてあり、それに定信の銘が書かれていた可能性のあること。

5 永久寺の東西障子絵は、それを安置した真言堂の建立供養が保延二年（一一三六）に行われていることから見て、その際には既に描かれてあったと推定されること。

6 永久寺真言堂の宝物の多くは、明治の廢絶まで伝持され、その後分散されたが今日その行衛を尋ね得ること。

7 永久寺の宝物が少なくとも一部藤田家に入っていること。

以上の諸点を総合するとき、この藤田本こそ永久寺真言堂に描かれていた東西障子絵にはかならないとみて誤りないものと思われる。これら

諸点の中でも、藤田本の色紙形に書かれた定信の筆蹟が一一四〇年を下らないものであり、真言堂の供養された保延二年、一一三六年にこれを書いたとすると、その書風の示す年代とも一致するのは特に注目される。そのほか、

1 藤田本の大きさ（全粟王塔図 堅一七七・八、横一四一・三厘）は、真言堂内陣、左右一間の柱間におかれた仏台障子帳を飾っていたものとしてふさわしい。

2 藤田本の画面に見るなまなましい搔傷の跡は、この絵がもと障子絵であつたことを物語る。

3 藤田本の画面にみられる後世の補彩は、もと永久寺真言堂を飾っていた真言八祖行状図の補彩と、色調において全く相似している。

などの条件も、この場合考慮されるであろう。

以上の理由により、藤田本の二図が永久寺真言堂から出たものであることは充分立証されえたと思われる。

八 その製作年代と作家

以上、藤田本が永久寺真言堂の東西障子絵であることはもはや疑いないであらう。するとこの藤田本は前に述べたように保延二年に描かれたことになるが、本図の製作年代を十二世紀中葉を下らないとみた私の前の論文における様式的判断はこれと矛盾するものではなく、一一三六年(保延二年)という時期を絵画様式の上でも充分可能にするものといえよう。ただここで注意されるのは、この絵が後世の補彩や補筆をこうむっていることで(これについては前稿で詳述した)、そのため一見しただけ

では右の保延二年説をとることに躊躇される虞れがあるかもしれない。しかし赤外線写真（図版Ⅴ）によって、オリジナルなすみきが跡づけられる箇所を検すれば、その線描がこの時代にふさわしい、おだやかな柔かみのある特色を示しているのを認めるであろう。山や岩の皴におけるその輪郭線や凹凸を無視した側筆のあららしいタッチの如きは明らかに後の補筆である。なお鉄塔及び五重塔の建築細部や山の重なりなどの表現にはいささかのくずれが感じられるが、それはおそらくこのような絵様がこの時代に幾度か写し伝えられた間に次第に生じたものと思われる。すなわち前にも述べたように、同種の図は中川の成身院にもあり（一一一〇年代）、また本図よりやや先ずる長承二年（一一三三）には仁和寺南院の経蔵でも同じ画題の障子絵が描かれているなど、この絵様が当時密教寺院においてしばしば描かれたことをうかがいうるのである。

このようにして藤田本が永久寺真言堂の東西障子絵であったことになれば、当然その筆者は前記した「置文」及び「内山之記」によって藤三宗広ということにならなければならない。藤三宗広とは藤原宗弘のことであるが、彼の画蹟で今日知られるものは一つもない。しかし右の「置文」「内山之記」の信憑性は、同じ堂内にあった真言八祖像の銘を定信筆といい、かつその作品が最近まで伝わっていた事実からも裏書されよう。しからばこの二つの記録に宗広筆とあるのは、充分信すべきものとすることができる。しかも宗弘は後述するように定信とほぼ同時代に活躍をしている人で、従って本図を彼の作品と比定しても決して不都合ではない。すると本図は、その画家の名前さえ判明するという極めて稀有な絵画遺品とみなされることになろう。

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教両部大経感得図

さて、藤原宗弘は宮廷絵師として知られた人で、そのことは当時の公卿日記からうかがわれる。すなわちその一つ「長秋記」には、保延元年（一一三五）七月十七日の条に次のような記事がある。

廳官季兼、権別当則清大和權守、絵師宗弘向鳥羽殿図地形、（下略）

これによると、永久寺真言堂の建立された前年、絵師宗弘は庁官季兼等と鳥羽殿におもむいて地形を図している。これは鳥羽御堂の一つ勝光明院造営に関するものであったらしく、彼は鳥羽院に奉仕する絵師であったことが知られる。また後鳥羽天皇の大嘗会にあたって、悠紀・主基の大嘗会屏風の製作を担当した絵所の絵師の仲間に彼の名もみえる。すなわちこれを記録した「山槐記」元暦元年（一一八四）八月廿二日の条は次の通りである。

（前略）於行事所勘日時、定所々預并絵師雑工、今日不覽之（中略）

悠紀方文書

大嘗会悠紀所

定絵師并雑工事

絵所

墨画

修理進藤原有宗

淡

内匠少允中原光永

作絵

中原吉永

張手

豊原永久

（中略）

主基方文書

大嘗会主基所

定絵師並雑工事

絵所

墨画

修理少進藤原有宗

淡

藤原行安

作絵

藤原宗弘

これはさきの保延元年から五十年もので、すると彼が参与した右の

仕事は、おそらくその晩年のことであろう。彼はこの時、主基方絵所において屏風の作絵を分担しており、悠紀・主基屏風製作の主任絵師⁽⁴⁴⁾は、両者の「すみがき」を担当した修理少進藤原有宗であった。かなりの年齢に達しながら、この場合作絵という補助的な役割にとどまっているのは、有宗ほどの社会的な地位を画壇に占めていなかったためでもある。しかし大嘗会屏風は、その当時の第一流の芸術家である文人、歌人、書家、画家が動員されるのを例としている⁽⁴⁵⁾。従って、藤原宗弘がこの屏風製作にえらばれている事実は、とりもおさず後白河院時代における代表的な画家の一人であったことを裏書していると云えよう。

このようにみてみると、宗弘は、絵所に所属する宮廷絵師で、その確実な作画期間が一一三五年から一一八四年に及ぶことを知りうるのである。宗弘の年齢で云えば、おそらく二〇代から七〇代にかけてであったろう。彼とほぼ同じ頃活躍した絵師には、藤原隆能や隆信、巨勢宗茂など、また絵仏師では頼源、智順、定智などがあり、そうした錚々たる画家たちと彼も肩を並べ、共に変動する社会を生きぬいたのに相違ない。

ところで、永久寺旧蔵で現在藤田美術館にある問題の二図は、この寺が権門をバックにして造営された関係で、これを描くについて宮廷絵師である藤原宗弘も起用されたのであろう。彼の事蹟からすると、藤田本は鳥羽殿の地形を図した翌年にあたり、従って彼の若がきの作品とみなしうる。平安時代とくに十二世紀の場合、宮廷や貴族たちの絵画製作の仕事に従事した宮廷絵師の活動は公卿日記などによって多数知られ、一方現に彼等の手がけた作品と思われる遺品ものこっている。しかしそれとても特定の絵師に結びつけられるものは、伴大納言絵詞のほか全く知

られないのが現状である。その点藤原宗弘という宮廷絵師の画蹟がたずねえられ、しかもその作品が彼の若がきの製作であることまでも明らかにしたのは、絵画史上まことに注目すべきことといわねばならない。

一方、宮廷絵師が藤田本のような仏教説話を描いているのも注意されよう。これと同じ画題のものを中川成身院の場合には画僧珍海が手がけているし、また長承元年(一一三二)覚鑿建立の高野山大伝法院の例では両界図をかける壁の背面に描かれた南天鉄塔図は、絵仏師定智が腕をふるっているのである。このように同じ絵様を絵師・絵仏師の別なく受持っている事実は、当時の画壇の実際を知る上の手がかりとしてもまことに興味深い。

以上考察してきたところによって、藤田美術館蔵密教両部大経感得の二図は、保延二年建立の永久寺真言堂東西障子絵として、宮廷絵師藤原宗弘が描いたものであると結論づけられる。従って本図は製作年次とその作家との明らかな平安絵画史上でも格別に注目される貴重な遺品ということになる。のみならず本図が、多分に世俗画的要素を含んだ大画面の仏教説話画として、数少ないこの種遺品の中で極めて重要な地位を占めるべきものであることを強調したい。

〔附記〕

本誌巻頭に、本論文の主題である藤田美術館の密教両部大経感得図に関する図版二図を掲げた。次に、若干の説明を附して本論の補いとする(全図は挿図11・12及び「美術研究」一八七号、図版I^{原色}・II・IV参照)。

その一(図版V)は善無畏金粟王塔下感得図部分、赤外線写真である。すなわち図の遠景右側、海辺のなだらかにのびた洲浜の向うに突出した

岩組が見える。その一角からさしだした枯枝に、大きく羽根をひろげた一羽の鵜がとまり、これに呼応して海上に頭をもたげる他の一羽の鵜を描いている。細波をたたんだ水面は遙かにひろがり、霞の中にとけこんでゆく春の穏やかな海景色である。墨一色であらわされた鵜は形も均齊がとれた確に描かれている。岩は白と緑の補彩で塗りつぶされ原初の趣を損ねているが、その輪郭線は赤外線写真でみると、松のそれと同様に、たっぷりした含みのある線で引かれているのを認めることができる。淡藍をかけた水面には、細いのびのびとした水波が、山形にアクセントをつけて描かれ、縹渺とした感じを巧みに与えている。この水の表現は鳳凰堂の屏絵や東寺旧蔵山水屏風のそれと共通し、十一世紀の伝統に根ざした特色あるものである。この水波の描法や鵜の描写、また岩や松のすみがきなど何れも習熟した筆使いであり、そこに当時の宮廷絵師のオーソドックスな画風の一端をうかがうことができる。

その二(図版Ⅶ)は、同じ善無畏金粟王塔図の右上に貼りつけられた色紙の部分で定信筆の銘(赤外線写真)である。天地二八・五、横二五・四センチの色紙を二枚横に継いだもの(右側の色紙の右端〇・六センチ截除される)。銘は一行十一字、全体で十六行あり、但し最初の二行は摩損が甚しい(図版に示したのは第五行目から第一一行迄で、この銘の全文及び全図は「美術研究」一八七号、三七頁参照)。この色紙二枚は現在何れも薄茶色を呈しているが、紫外線を照射すると、二紙の発する螢光に差異があり、色変りの色紙(右側は赤)を用いていたことが知られる。なお銀の細かい切箔を一面に散らしてある。上品な料紙に書かれた大ぶりのこの書は、田中親美氏がいち早く断定されたように、明らかに定信の個性的な

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教阿部大経感得図

書体を示している。これが書かれた保延二年はまさに彼の四十九歳に当たる。定信(一〇八八―一五五六年)の筆蹟中、道風の屏風土代及び行成の白樂天詩巻のそれぞれ巻末にある保延六年(一一四〇)の識語や、永治元年(一一四一)頃と推定される久能寺経譬喩品におけるほどに枯れた趣を呈していない。この銘は、いくつか現存する彼の真蹟に、年次の確実な一遺例を加えるものであり、書道史上極めて重視されるであろう。

註

- 1 本稿は昭和三十七年五月二十七日の美術史学会第十五回大会における研究発表の際「永久寺と藤田本阿部大経感得図」と題してその要旨を発表し、さらにこれに修正加筆したものである。
- 2 永久寺の沿革については、永島福太郎氏の「永久寺とその分離」(同氏著「奈良文化の伝統」所収 四五―一六頁、一五四四年)がある。
- 3 「太平記」一八(日本文学大系本、二ノ二九頁)、並びに「続史愚抄」卷二(統国史大系一ノ五七一頁)参照。
- 4 「天理市史料集」(一九五八年)永久寺の条所収、史料番号九八、内山惣寺家当知行分の文書(奥に「天正十三年乙酉八月吉日永久寺満寺衆等」とある)及び九九参照。
- 5 石出吉深「所歴日記」(内閣文庫本、三冊本による)。
- 6 「大和志料」に、永久寺はまた石上の神宮寺と号したと記されている。いつ頃から神宮寺となったかは明らかにしたいが、しかし、古くは布留社の神宮寺は他にあつて、永久寺とは別である。なお江戸末明治初頭における同寺の情勢については「神仏分離史料」(一九二九年)六頁以下参照。
- 7 この園池を中心とする永久寺遺跡の実測が先年奈良国立文化財研究所森羅氏によって行われた。その結果は「永久寺の建築と庭園」の題で同氏の「中世庭園文化史」(八一―九頁、一九五九年)に所収されている。但しその実測図(八三頁)における真言堂(灌頂堂)の位置は誤りである。なおこの廃寺の位置は昭和三十三年八月天理図書館長富永教授の御嚮導により始めて視察することができた。
- 8 これらの絵図のうち、正保二年本(竪七三・〇センチ、横六六・八センチ)及び享保十五年本(竪八八・五センチ、横九八・〇センチ)は永久寺角之院末裔鈴木富次郎

氏、また前記二本の写し及び明和五年本写しは天理図書館に蔵されているほか、天理市の堀広良氏の許にも江戸の絵図がある。なお版木は鈴木家の所蔵。これら絵図の所在については、前記富田教授並びに天理高校小田基彦氏に御教示を得た。

9 永久寺旧蔵で現在所蔵の知られるものは、彫刻では東大寺蔵持国天及び多聞天像、東京世田谷観音寺蔵康円作不動八大童子像(永久寺観音堂)、東京静嘉堂・熱海美術館ほか他家分蔵の康円作四天王眷属像四体(永久寺真言堂)、また書蹟・工芸では後註34に記す熊谷氏蔵の伝行成筆仮名消息、藤田美術館の小野小町像(註41)、芸大所蔵根来塗盆などである。絵画については本文中に記す通りであり、また口の不動(石仏)に関しても本文で述べる。そのほかにも永久寺から流出の彫刻などがあるらしいが、いまだ調査するにいたっていない。なお田村吉永氏稿の「内山永久寺誌」(一九二九年七月に永久寺の歴史などを簡単にまとめたもの、和綴で現在天理図書館に所蔵されている)の最後に、この永久寺旧蔵の遺品の行衛として、智恵光院本尊は奈良二月堂茶堂、十三重塔は法隆寺の北畠男邸、口の不動は須磨の藤田男別邸へそれぞれ移ったと記している。そのほかは下馬標石についてふれる程度である。

10 森末義彰氏「内山永久寺記録」(「美術研究」六九号、一九三七年)。森末氏が「内山旧記」としているものを、私は「内山置文」と呼ぶこととした。それは巻末に別筆(室町時代)ではあるが、「於此置文者当山肝要者也、永可置中院御経蔵者哉」の記載に基づくからである(「置文」の外題には巻首と同一の字句すなわち「内山事」と記しているにすぎない。但しその筆蹟は文保よりやや下るものようである。またこの巻物のちにつけ加えられた表紙の外題は、室町時代の筆蹟で「正安年中内山寺置文身永久寺一巻」と書かれている。筆蹟については伊東卓治氏の御示教による)。なお森末氏が公刊された「内山之記」並びに「内山置文」は、同氏が解説で述べられているように、主としてその伽藍・堂舎・仏像等に関する記載の部分だけで全文ではない。

近年発行の「天理市史料集」永久寺の条、九一―一二八頁には、右の二記録のほか後述する「縁起」、また文書などをも収録している。永久寺関係の史料が一応まとめられている点は貴重であるが、難を云えば「内山置文」は東京国立博物館の原本によりながら、重要な真書が見逃がされてしまったこと、また「内山之記」の方は、定本とすべき成實堂文庫によらずに保井文庫本に基づいていることである(この保井文庫本は森末氏が「美術研究」に公刊されたものと全く同文であり、従って全文ではない)。

11 成實堂文庫本「内山之記」は史料編纂所蔵のレクチグラフによった。これを披見するについては同所辻彦三郎氏の御高配を賜った。

12 この縁起(片岡家蔵)は「天理市史料集」一一八―一二二頁に全文が掲げられている。但し右の縁起は現在行衛不明で、本文は同家私版の謄写版本によった。

13 「大乘院日記目録」、「尋尊大僧正記」にもしばしば永久寺に関する記事が見える。永久寺が中世大乘院の末寺であった関係によるのであろう。また成實堂にある大乘院文書に収められている「内山永久寺御記録抜書」は、寺社雜事記や寺院雜要抄などから永久寺関係を抜書したもの。なお永久寺は近世になって興福寺から離れ独立した。

14 菅家本「諸寺縁起集」(「校刊美術史料」七輯五三頁)、なお永久寺の項とは別に元興寺の禅定院の項にも永久寺に関する記載が見える(同三〇頁)。すなわち「(前略)大和国永久寺本願者、同頼実法印也、永久寺學当院、同時仁建立云々、永久寺者、依鳥羽院之勅建立、仍号永久寺云々」と記されている。

15 「亮恵上人画像記」(一九四一年)は、亮恵上人の画像と永久寺絵図などを図版(原色一、単色六)とし、それに島田筑波氏「永久寺開山亮恵上人画像記」の解説を収録した和装形式の大形本である。ここに掲げた裏書及び挿図3は右の書によった。

16 光賢は応永十七年八月廿九日(一四一〇)六四歳で示寂(常樂記)。するとこの裏書は応永三年に書かれたこととなる。光賢は応永十一年東寺の学頭職に補せられ(東寺百合文書)、また印信についても長慶天皇の勅問に答えているなど学徳高き僧であったことがわかる(大日本史料七ノ一三、三七―三七七頁参照)。

17 「内山之記」の一、真言堂天井之蔵御札文云 として奉施入 永久寺三宝とあり、多数の田畠を永治元年十月十八日施入したことが知られる。永久寺という寺号は「内山之記」「置文」とともにこの永治以前に用いられた例をみない。

18 永久寺多宝塔は「置文」によると保延三年に建立され、同年十一月十六日興福寺一乗院玄覚が導師となって供養したとあり、かつこの項の裏には「塔供養開白詞」を記している。この詞についてはいまだ公刊がないので、その全文を次に示す。

塔供養開白詞 導師中僧正玄覺

敬白円遍法界摩訶毗盧舍那乃至尽虚空法界三宝願海而言、今信心大法主、抽一心之丹誠、凝三葉之百善、草創一基宝塔、安置四方四仏并図繪十六善神王形像、又書寫諸大乘經、殊撰吉日

- 良辰、敬展供養齋筵、其旨趣者、大法主積善作慶宿運多幸、早登綱維之崇班、既為法家之棟梁、就中興隆佛法為己任、広作仏事為身營、遂卜幽閑之地、以為禪定之栖、先是造建數字堂舎、今又草創一基宝塔、實是風煙勝陀之地、水石幽奇之處也、凡塔婆者滅惡生善之鳴基、增福延命之方便也、是故經云、造立仏塔福利難思、三世如來所共稱讃云々、仍殊發弘願遂以營造、其内安置四方四仏并図繪十六善神形像、心中所祈廻向区分、先宝塔一基并尺迦像一軀又十六善神像者、奉為前大相國殿下也、造塔福利弥延百年之寿算、仏神擁護鎮誇一家之繁昌、次藥師像一軀者、奉為皇后殿下也、還念本誓授与法樂王軀無恙宝寿有添、次弥勒像一軀者、奉為禪尼殿下也、坐禪風靜觀念水澄、洗五障之塵身淨六情之罪垢、次弥勒像一軀并法華經一部者、是為先師法印也、仏則娑婆世界之依怙、既有來迎引摂之願、經亦濁世末代之目足、是則直到道場之方便也、早拔五趣之輪廻、引摂九品之淨利、廻向区分旨趣如此、且三宝法界垂知見給
- 19 元興寺禪定院は菅家本「諸寺縁起集」(校刊美術史料)によれば永久年中頼実の建立とあり(「大日本史料」三ノ一六、永久二年雜載の項参照)、また「尋尊大僧正記」文明十五年九月十三日の条(「大乘院寺社雜事記」八)に「多宝塔八角也」と記される。
- 20 「僧綱補任」卷五(大日本仏教全書 興福寺叢書 一ノ二二五—七八頁)参照。
- 21 「尊卑分脉」一 五一—五頁。
- 22 「興福寺別当次第」卷之第二(大日本仏教全書 興福寺叢書二 一九頁)、「大乘院日記目録」一(「大乘院寺社雜事記」一二—二四頁)。
- 23 「置文」によると、大喜院は寢殿一字、雜舎一字、本願前大僧正隱居之地也とあり、承安三年十月五日から作り始められると記している。温室一字も同様に同年三月に造作され、十一月一日始沸御湯了、とあって、尋範が興福寺別当を十月に罷められた直後、これらの堂宇が建てられているのを知る。

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教兩部大經感得図

- 24 「置文」によると、藤原忠実から大乘院僧都(尋範)に当たった御教書に、内山御祈願所の言葉がみえる(「天理市史資料集」九二頁)。
- 25 亮恵以後の永久寺の山務は、彼の法流に受けつがれ、その歴代については「置文」の山務管領次第(「天理市史資料集」九八頁)、並びに内山寺院主補任次第(「尋尊大僧正記」四六、文正元年七月廿五日の項「大乘院寺社雜事記」四、八六頁)、また上乗院僧正の法流(同僧正記一五八、明応三年正月十八日の項、同一〇、三六〇頁)によって知られる。そのほか内閣文庫本「内山上乗院系伝」も見逃し得ない。これは第一世亮恵から、江戸末期第二十八代亮珍に至るまでの代々の名が記されており、さらに略伝も添えられている。
- 26 この示寂の年については、「置文」には養和寿永之比歟と記すだけであり、光賢は別の説を掲げている。既述亮恵上人画像銘(挿図3)参照。また前記「内山上乗院系伝」には、文治二年五月二十八日、八十九歳卒とあり、校者亮観はその傍らに、旧来治承二年説を用いるは誤りなりと記している。
- 27 現観房上人は「浄瑠璃寺流記事」によると、これより十年後久安二年(一一四六)西小田原山寺の浄瑠璃寺の本堂に大般若經を納めたときの供養導師を務めている。
- 28 弘誓院大納言藤原教家は良経の子で、能書家としても知られる人である(「尊卑分脉」一ノ七七頁)。貞応二年(一二三三)には浄瑠璃寺南大門の額を書いている(「浄瑠璃寺流記事」)。
- 29 柳原家記録「内山永久寺真言堂盗入時日記」(史料編纂所謄写本)による。応永廿六年四月廿日の夜真言堂に盗賊が入り、両界曼荼羅をはじめ仏器が持出され、やがて五月四日にその両界図が戻るまでの経過を詳しく記したもの。奥に「応永廿六年五月十一日以惣寺雙紙写之訖本日記惣寺仁可有也 上乗院」と記され、更に「右一冊上乗院大僧都亮觀秘藏本写之了」(朱書) 寛政二十四九 均光」とある。
- なお右の本文が「内山寺記」の名で、続群、釈家部二十七下(二九〇—一頁)及び大日本仏教全書 寺誌叢書四(三六六—七頁)に収められている。
- 30 堀池春峰氏「大和・中川寺の構成と実範」上・下(「仏教史学」六ノ四・七ノ一、一九五七年一〇月、一九五八年二月)。
- 31 引用文は徳川本「真俗雜記」卷三(史料編纂所本)による。なお真言宗全書三九の「真俗雜記問答鈔」では第十七に所収(二九四頁)。

32

この白衣小院は名を宗俊といい、また永久二年仁和寺北院経蔵の両界曼荼羅を描いている。すなわち「三僧記類聚」巻二（仁和寺本、史料編纂所謄写本による）に、次のような記事がみえる。

北院改造事

天永四年四月十四日甲子、今日北院為改造破始並鏘始了、七月十日戊子北院経蔵并廊之棟上、

永久二年正月廿日丁酉自今日以白衣小院宗俊、始図絵両界大万タラ、是北院経蔵之料也。

また「本要記」（仁和寺本、史料編纂所影写本による）には「三僧記類聚第十云」として右と同じ文が記されている。

33

「三僧記類聚」巻三（仁和寺本、史料編纂所謄写本による）。

34

天理市丹波市堀広良氏蔵、この文書を次に記す（挿図8参照）。

真言堂御物八祖御影新写事下行帳

上品

絹地絵具等一切下行啓枚
横五尺八寸分
横三尺七寸分

中品

絹地絵具等一切下行啓枚
横五尺八寸分
横三尺七寸分

下品

絹地絵具等一切下行啓枚
横五尺八寸分
横三尺七寸分

同上御堂中八祖御伝新写雑事下行帳

上品

絹地絵具等一切下行啓枚
横五尺八寸分
横三尺七寸分

中品

絹地絵具等一切下行啓枚
横五尺八寸分
横三尺七寸分

下品

絹地絵具等一切下行啓枚
横五尺八寸分
横三尺七寸分

右

上古之御物筆法深妙、実海内無比類貴宝候間、御

副本被為在候様奉祈願候事御座候、拙面深

奉恐入候得共蒙御命候ワハ、軸丹誠実

執筆調進可申候条、毛頭相違有之間敷奉

存候、仍註進如此御座候也、誠恐惶謹言

后二月八日

藏人所衆正六位下行式部省大録菅原朝臣為恭上

この為恭の文書に記されている真言堂というのは、永久寺のそれに相違ない。なぜならば、後述する永久寺から流出した真言堂の真言八祖像並びに真言八祖行状図と右に記された寸法とがほぼ一致するし、また堀家には永久寺に關係する資料をいくつか蔵されているからである。なお為恭が藏人所衆正六位下に叙位されたのは逸木盛照氏著「冷泉為恭」によると、二十八九歳の頃という。また右と同じ肩書の落款のある作品は、松村政雄氏編「為恭落款年譜」（「国華」八四四号、一九六二年）によれば、嘉永四年五月（二九歳）の例に見えるという。しかし同氏は為恭がこの肩書を用いるに到ったのは、同四年よりもやや前からであるとみている。しかるにその後の落款についてみるのに、安政二年（三三歳）七月以降式部少丞の肩書を使用している。従って前掲の為恭の文書は嘉永三・四年から安政二年七月までの間に書かれたこととなる。

一方為恭は嘉永四年七月永久寺貫主亮珍から同寺の珍宝「三宝感応要録卷之下」（紙背に伝行成筆仮名消息あるもの）の巻物を譲受けており、このことは為恭と永久寺との結びつきが深かったことを物語っている（逸木氏の前掲書四七頁に、その巻物を譲るについて為恭へ宛てた亮珍の跋文の全文が掲載）。或いは為恭がその前後に真言堂の諸図を新写したという可能性も考えられる。また現在残っている為恭写の紙本着色真言八祖行状図（三図）は、式部少丞の肩書となっており、安政二年以後にも当寺で模写に従ったことが知られる。とにかく彼が青年時代から永久寺と深い關係にあったのは事実で、晩年身をひそめたのもそうした因縁によるものであろうか。

なお右に挙げた為恭の文書は、価格が一々書かれていて、それも上品・中品・下品と三段階に分け、精粗によって価格に差をつけているのも興味深い。

35

絹本着色の亮恵上人画像は、竪一三〇・三センチ、横八四・二センチの大きさのものである。牀上の青畳座に坐した亮恵は、墨染の衣をつけ、両手で数珠をまさぐりながら斜め前方に眼を向け、前歯を少しあらわし、あたかも人と物語っているかのような老僧姿に描き出されている、親しみのこめられた画像である。上方には色変りの色紙形を劃し、そこに亮恵の人となりをつたえた賛文が書かれている。伝統的な作風をうけついで穏やかな表現のもので、賛文の書風と共に鎌倉中期を下らない佳品であ

る。なお画像の向って左上に明治八年心なき日蓮宗僧の書き加えた位牌形南無妙法蓮華經以下の文字がある。

36 秋山光夫氏の論文にもとづき、この真言八祖像について記すと次の通りである。

これは絹本着色で、八幅あり、各幅とも多少の相違があるが、凡そ縦一五一・五センチ(五尺)、横一〇六センチ(三尺五寸)の堂々たる大幅で、その図様は東寺の真言七祖を踏襲したものという。また上方には三枚の緋色紙形を置き、これに径一寸位の行、草体の文字を以て各僧の伝歴が書かれてあり、八祖像としては極めて優秀な作であると推賞されている。なおこの画像が永久寺真言堂の伝来であることは表装裏の文字のほか、図の裏面上端にも永久寺の三字が認められると記されている。一方この画像の寸法は前註34の為恭の文書に見える寸法に比べて、縦八寸、横二寸のそれぞれ差がある。

37 真言八祖行状図八幅は、前記註36の真言八祖像と同じように大画面のもので、その図の寸法は各幅に多少の差があるが、大体縦一七三・二センチ(五尺七寸二分)、横一一〇・九センチ(三尺六寸六分)である。この行状図については既に森暢氏が「真言八祖行状図に就いて」(「国華」七七七、一九五六年十二月)で論述されている。私も藤田美術館の密教両部大経感得図を問題としたとき簡単にふれたが、最近再び調査の機会をもち、また当研究所において写真撮影をすることができたので、その詳細は別に考察するつもりである。この八祖行状図は、従来考えられていた鎌倉中期よりはさらに遡るものであることをここであらかじめ記しておきたい。

38 為恭写しの真言八祖行状図(紙本着色)は現在三幅あり、その二図は富岡氏の許に他の一図は寿延寺の所蔵するところである。

39 挿図8及び註34参照。

40 藤田美術館の宝物台帳の九号「巻帖屏録」(明治三十七年七月改正)二三頁に、一、嵯峨帝絵詞空海阿字義伝 一卷 とあり、この巻物の形状などを詳述し、続いてその伝来を比較的詳しく述べている。すなわち、

伝来大和国内山永久寺坊中首坐浄乘院堯男也此卷嘗而冷泉為恭ノ所持ニシテ為恭愛死ノ時迄同院ニ潜伏シタル之故ヲ以テ所持之画巻粉本ハ往々同院ニ遺リテ堯男ニ伝フ維新之際僧侶一般性氏ヲ称スルノ制ニヨリ永久寺ハ常盤木ノ性ヲ称ス 幾干モナク永久寺ハ庵寺ト成リ堯男モ又俗籍ニ編入シテ藤井ト改メ奈良市中新屋町ニ藤井堯

大和永久寺真言堂障子絵と藤田本密教両部大経感得図

男ノ名ヲ以テ綿商ヲ営ムニ至レリ 本巻ノ如キ為恭所蔵ノ画卷往々伝フハ故ナキニ非ザル也(以下略)

とあって、為恭所持のこの巻物が永久寺に伝えられたことを知る。

41 同じく藤田美術館宝物台帳十一号「香具置物卓棚飾具録」(明治三十七年七月改正)七四頁に、木彫置物として次のように記される。

一 木彫彩色卒塔婆小町像 台共
丈壹尺 横壹尺五寸

(中略)

伝来内山永久寺(下略)

42 これは前註40と共に同館中西秀太郎氏の御示教による。

この像の所在した旧位置は挿図2に示した永久寺絵図中にみえる山手の岩石塊の箇所、享保十五年の絵図ではこの岩を「口の不動石」と註記している。現在の不動像はその岩からきりとられたものらしく、裏側に鑿のあとが認められる。花崗岩に彫られた浮彫りの不動明王像は、左足を垂下して岩座上に坐す半跏像で、身長一五一・五センチ(頭頂から左足迄)、素朴な作風を示し、その表情はおだやかである。室町時代の作と思われる。なおこの石の大きさは、高さ二四八センチ、幅(不動の肘のところを延長して計測)二一五センチ、厚さ三八センチ。浮彫りの深さは約六・七センチ。この不動像の調査にあたっては、所蔵者井植氏をはじめ、大徳寺立花大亀和尚、同道いただいた毛利久氏に種々御世話になった。

43 仁和寺南院経蔵は長承二年六月七日供養が行れたが、その堂内障子に南天鉄塔と金粟王塔図のあったことが「本要記」(仁和寺本、史料編纂所影写本による)によって知られる。すなわち南院経蔵の項に「古徳記」を引用して次のような記事がある。

古徳記云、同経蔵同二年六月七日供養、高野御室請僧十口、御願文云、安金銅多宝

塔一基、其中奉納仏舎利、胎金阿界万荼羅、各一鋪、造立三尺不動、弘法大師御影、仏前

44 東間障子図南天鉄塔并北天竺金粟王塔等、同西間図観自在尊所居補陀落山様云々、

45 秋山光和田氏「平安時代のすみがきについて」(美術研究二〇八号、一九六〇年)参照。

46 秋山光和田氏「大嘗会屏風について」(美術研究一一八号、一九四一年)参照。